

7/5

広報ふじえだ

No.1058

2010

元気なふじえだ

藤枝

特集

魂の俳人村越化石

見ゆるごと堂袋に^は来てか^みがむ
化石



山すそに咲くホタルブクロ（岡部町青羽根）

心眼 魂の俳人 村越化石

▼平成14年11月15日の句碑除幕式に出席した化石さん



藤枝市出身の俳人・村越化石さん。16歳のときにハンセン病の宣告を受け、治療のために故郷を離れました。現在は、群馬県草津町に暮らしています。治療法がなく、死と隣り合わせだった時期を過ごし、戦後、特効薬により病が完治した後も、後遺症を抱えながら、生命の力強さを詠み続けています。その句作から「魂の俳人」と呼ばれ、多くの人々に勇気を与えています。昭和58年に蛇笏賞、平成20年には山本健吉賞など、俳句界を代表する各賞を受賞。平成3年には紫綬褒章も受章されています。

今号では、藤枝を代表する文学者の一人である村越化石さんをご紹介します。

☎文化財課 ☎643・3111 内線758

「ハンセン病」は、「癩」という言葉で呼ばれ、過去にはさまざまな偏見を伴い、患者およびその家族の尊厳を傷つけてきました。このことを踏まえ、『広報ふじえだ』では、固有名詞や資料を引用する場合など、必要最小限の範囲で「癩」という言葉を使用しています。

望郷の目覚む八十八夜かな

平成7年作

茶の花を心に灯し帰郷せり

平成14年作



▲化石さんが幼少時代、魚を捕って遊んだ朝比奈川。今でも当時と同じ豊かな自然が残っている



▶玉露の里の一角に立つ句碑。点字も添えられている

よき里によき人ら住み茶が咲けり

平成14年作

平成14年、玉露の里の一角に村越化石さんの句碑が建立されました。句碑に刻まれた「望郷の目覚む八十八夜かな」は、16歳のときに故郷を離れた化石さんがふるさとを懐かしく思い、73歳のときに詠んだ句です。

「望郷の句は私に多い。故郷を離れてすでに久しく、見えない眼の奥にいつも故郷がある。夏も近づく八十八夜は新茶の初摘みの頃、村中が茶の香に包まれるよき季節。生気溢るる八十八夜は望郷とともに私の好きな言葉でもある」(村越化石句碑建立記念集『大龍勢』より)

句碑の作者は、藤枝市在住の石彫家・杉村孝さん。赤銅色の句碑は、母が子を抱くようにも見えます。句碑の除幕式に出席するため、60年ぶりに化石さんも帰郷し、ふるさとの人たちとの再会を果たしました。

村越化石さんは、現在87歳。群馬県草津町にある国立療養所栗生楽泉園で暮らしています。草津の自然の中で、句作に励む化石さんをご紹介します。

村越化石さん略年譜

大正11年	12月17日、静岡県志太郡朝比奈村（現・藤枝市岡部町）で生まれる。
昭和13年（16歳）	ハンセン病の宣告を受け、治療のため郷里を離れ上京。東京で治療に専念。
16年（19歳）	奈美と結婚。草津湯之沢を経て、国立療養所栗生楽泉園に入園。
23年（26歳）	プロミンによるハンセン病の治療が日本で始まる。
24年（27歳）	このころ化石さんもプロミンを注射。大野林火主宰の『濱』に境遇を隠したまま初投句。
25年（28歳）	林火に境遇を打ち明けて、楽泉園高原俳句会の指導を依頼する。
30年（33歳）	高原俳句会合同句集『火山翳』刊行。片目の視力を失う。
37年（40歳）	第1句集『獨眼』刊行。
45年（48歳）	残る片目の視力も失う。
49年（52歳）	第2句集『山國抄』刊行。第14回俳人協会賞受賞。
57年（60歳）	第3句集『端坐』刊行。
58年（61歳）	第17回蛇笏賞受賞。
63年（66歳）	第4句集『筒鳥』刊行。
平成3年（69歳）	紫綬褒章受章。
4年（70歳）	第5句集『石と杖』刊行。
9年（75歳）	第6句集『八十八夜』刊行。
14年（80歳）	村越化石句碑除幕式。60年ぶりに故郷に帰郷。
15年（81歳）	第7句集『虫袋』刊行。
19年（85歳）	第8句集『八十路』刊行。
20年（86歳）	第8回山本健吉賞受賞。



化石さんの部屋の前のワレモコウ

「その時、甲陽は病気が進行して声を出すこともできず、目も見えなかったんだよ。けれど、句作にはとても一生

昭和18年、化石さんは、高浜虚子の「ホトトギス」に属する本田一杉氏に指導を仰ぎ、俳誌『鳴野』に入会。医師でもある一杉氏は、各地の療養所のハンセン病患者に俳句を指導して

いた。

化石さんは、楽泉園にできた「栗の花句会」（現・高原俳句会）で、同じ療養所の句作の先輩であった浅香甲陽氏と親交を深め、俳句精神を学びます。

昭和22年には、一杉氏が楽泉園を訪れ、俳句の指導を受けます。

「その時、甲陽は病気が進行して声を出すこともできず、目も見えなかったんだよ。けれど、句作にはとても一生

「子どものころの思い出というのは、いくつになってもよく覚えていいるものだよ。ふるさとの小道や、そこに咲く花など……どれもこれも懐かしいね。姉と二人姉弟だったから、よく、ほかの家の子どもたちと一緒に、朝比奈川で魚を捕って遊んでね。ハエに似た『ジバチ』というハチをふるさとでは『ハイバチ』と呼んでいたけど、そのハチの巣を探して、掘る遊びが面白くて、熱中したものだよ」

昭和29年作

「新聞に投句するのに本名は名乗れないからね。化石という名は、故郷に帰ることもできない、世の中に出て暮らすこともできない、生きながらにして土の中に埋もれ、すでに石と化した物体のような自分を『化石』になぞらえて名付けたんだよ」

昭和16年には、草津町の国立療養所

「肉眼はものを見る。心眼は仏を見る。心眼は仏を見る。」

俳句は心眼あるところに生ず。」

という言葉だった。俳句は肉眼で作るのではない。心の眼で俳句を作らなくてはいけないということだな。甲陽は大変喜んだんだよ」

楽泉園での長い闘病生活。この間には、語りつくせないほどの悲しい思い出もあったといひます。終戦前後は、物資や食料が不足。療養する人たちは、病気の体をおして、山を開拓し、ジャガイモやカボチャを作ったそうです。医薬品も不足していて、多くの人たちが苦しみの中で亡くなっていくのを見てきた化石さん。自身の死を覚悟しながらも、句作を続けていました。

昭和18年、アメリカでハンセン病の特効薬「プロミン」が開発されます。長らく不治の病とされていたハンセン病は、治療によって治る病気となったのです。しかし、日本でプロミンによる治療が始まるのは、戦後になってからでした。このプロミンの効果は絶大で、これまで、死と隣り合わせの闘病生活を送ってきた人たちにとって、新しい時代の幕明けとなりました。



▲化石さんの8つの句集

除夜の湯に肌触れあへり生くるべし

新年への希望。ハンセン病の特効薬プロミンの開発により、療友とともに奇跡的な薬効に浴して一年。生命感を初めて見だし、決意を詠んだ句。

昭和25年作

栗生楽泉園に入園。現在もここで暮らしています。

生き堪へて七夕の文字太く書く

楽泉園内の俳句仲間七夕を祭った時の作。子どもたちにも来てもらい一緒に飾り付けをした。生きていてこそと思った。

昭和26年作

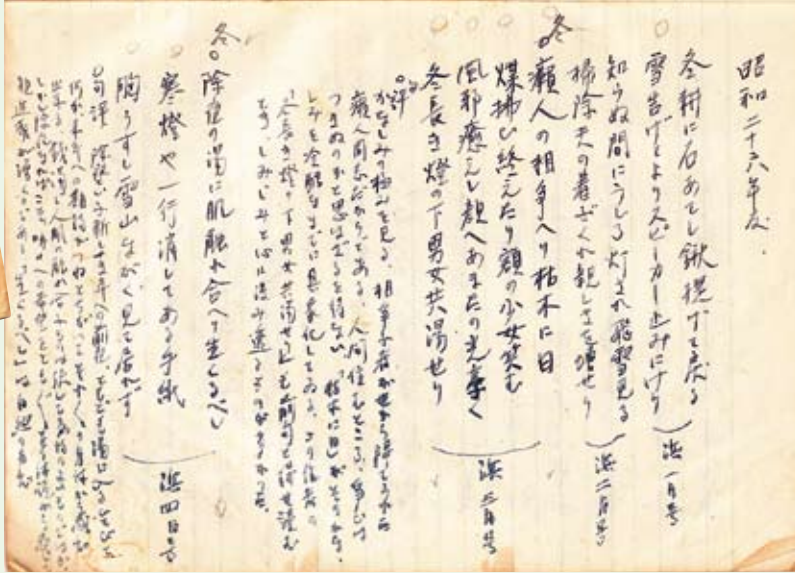
昭和13年、化石さんが旧制志太中学校4年生（現・藤枝東高校1年生）の時、ハンセン病の発病が見つかり、化石さんは中学校を中退します。

「まだ子どもだったから、事情がよくわからない。とにかく東京へ行って治療に専念するよう言われたんだよ。それを拒むと母が『それなら私と一緒に死んでくれますか？』と言ったんだ。私は言葉を失ってね。今にして思えば、そこまで言わなければ、この子は行かないと思っただろうね」

故郷を離れた化石さんは、東京のいわゆる病人宿で治療に励みます。その時、療友の勧めで、初めて俳句と出会



▲化石さん直筆のノート。投稿した俳句を年代順に記してある



生い立ちは誰も健やか龍の玉

平成12年作

龍の玉の艶やかさから汚れない幼子を連想。生い立ちは誰もみな、健やかであったのだ。生きることにしき、ありがたさ、命の尊さを改めて思い起こしての句である。

村越化石さん（本名・英彦さん）は、大正11年12月17日に志太郡朝比奈村（現・藤枝市岡部町）で生まれました。

つるばらや生き会ひて母の辞儀篤し

昭和29年作

母との面会。「会ひて安し夏の夜母の横坐り」とも詠った。会えたことで母は安心し、10日ほど泊まって帰っていった。

います。その後、東京から群馬県の草津温泉にあった湯之沢地区へ。このころ、妻となる奈美さんとも出会います。地元の俳句仲間との交流も始まり、新聞の地方版に俳句を投稿するようになります。「化石」という俳号は、このころに付けたもの。

「新聞に投句するのに本名は名乗れないからね。化石という名は、故郷に帰ることもできない、世の中に出て暮らすこともできない、生きながらにして土の中に埋もれ、すでに石と化した物体のような自分を『化石』になぞらえて名付けたんだよ」

昭和16年には、草津町の国立療養所



▲化石さんの部屋の庭先



▲園内を散歩する化石さん



▲楽泉園近くの諏訪神社の森。何度も足を運んで、水音や鳥のさえずりに耳を傾けた。林火氏とここで句作したという。

生きねばや鳥とて雪を払い立つ

失明から立ち上がるも、私の日常はまだまだおぼつかなかった。

昭和46年作

閑うて鷹のゑぐりし深雪なり

深雪に残った傷跡から、ひろがった鷹へのイメージ。俳句作りは合い。気合いが奥にあるものを引き出す。この句は共鳴者が多く、私の代表作となった。

昭和43年作



▲大野林火氏（明治37年～昭和57年）。第3代俳人協会会長。

▶かつては楽泉園内にたくさん咲いていたという松虫草。林火氏は楽泉園を訪れるたびに、花を摘んで帰ったという

松虫草今生や師と吹かれゆく

昭和44年作

毎年おいでくださる林火先生と、先生の好まれる松虫草の咲く原っぱへご一緒した。私は病室からの参加であった。師恩は尽きない。

昭和24年、大野林火氏の句に感銘を受けた化石さんは、林火氏の主宰する俳誌『瀆』に入会します。初めは、病を隠し、匿名での投句でした。この年、本田一杉氏が亡くなります。翌年、化石さんは自らの病気を明かし、林火氏に高原俳句会の指導を依頼します。「本田一杉先生が亡くなられた後、高原俳句会の指導者がいなくなってしまう。ちょうど、私が林火先生の『瀆』に入っていたもんだから、頼んでみようということになってね。けれど、まだ病氣のことを打ち明けていなかった

寒餅や最後の癩の詩つよかれ

昭和31年作

私たちが最後のハンセン病患者になるのを願っていることを、林火先生に申し上げた。その覚悟で俳句を作りなさいと励まされた。

昭和30年、片目の視力を失った化石さんは、ますます俳句が心のよりどころになります。そして、自分たちの代でハンセン病患者の苦しみを終わりにしたいという強い思いを持って句作に

打ち込むようになります。このとき、境に、化石さんの俳句は、生きる証を込めたものになっていきます。「我々が最後のハンセン病患者でありたい。もう二度とほかの人たちにこの

苦しみを味わってもらいたくない。『寒餅や最後の癩の詩つよかれ』は、その気持ちを含めたものだ。林火先生は常々、病氣の句は作ってもいいが、病氣に負けたり、甘えたりした句は駄目だと言われた。ようやくこの病氣が治ってきたと実感できたとき、『我々が最後の癩者になると思って作っています』と林火先生に申し上げたんだ。先生は『そうだ、その覚悟で俳句を作りなさい』とおっしゃったんだよ」昭和37年、化石さんは初めての句集『獨眼』を刊行します。

天が下雨垂れ石の涼しけれ

昭和51年作

林火先生に、この句は無欲の境地だといわれた。ぼっとんぼっとんという雨垂れの音、青苔のついた形のよい石を頭の中に浮かべた。

その後、化石さんは、第2句集『山國抄』、第3句集『端坐』、第4句集『筒鳥』と次々に句集を刊行。この間、残る片目の視力も失い、師と仰ぐ林火氏が死去するなど、悲しい出来事も起こります。しかし、化石さんは「心の俳句を作りなさい」という師の教えを胸に刻んで、あるがままを受け入れる境地に至ります。ハンセン病に対する嘆きや苦しみを超越した生命の尊厳、力強さを詠み、いつしか「魂の俳人」と呼ばれるようになりました。そして、

今もなお、「生きる」とは何かを、俳句を通して真摯に追求し続けています。「日本の伝統文化・俳句は、省略の詩であり、こういうものは日本にしかない。松尾芭蕉の句が今も愛されているのは、簡潔で短い詩の中に良さがあるからなんだよ。私は、俳句は永遠に滅びないと思う。いつまでも俳句を愛し、日本語の美しさ、深さ、面白さを、これから楽しんでいきたいと思う」化石さんの俳句への情熱は、今も尽きることはありません。